

夢と希望を抱いてやってきた新天地、長崎県。それぞれの舞台で輝く人々をご紹介します。

# 豊永レイ子さん



最後までもしれない商店

ご自宅の庭は広々としていて、まるで公園のよう。伸び伸びと子育てができる環境だ。



愛犬のトラも大きな庭で  
杵岐ライフを満喫!

夫の趣味は釣り。杵岐では毎日、新鮮で美味しいものが食べられて幸せです。



今年が最後までもしれない商品を扱っています。

右から「島の柚子シロップ」「島の柚子ごしょう」「不思議調味料ゆべし」。どれも杵岐産の柚子を使っていて、たまらない風味が魅力。洗練されたパッケージで島の新たな名物となった。

最後までもしれない商店  
杵岐市郷ノ浦町渡良浦1154-1  
TEL.090-7450-4299

最後までもしれない商店 検索

## 福岡出身の豊永レイ子さん

んは今から四年前、地域おこし協力隊として杵岐へやってきた。栄養士の資格を持ち、これまで食品関係の仕事に携わってきた豊永さんにとって、杵岐市が募集した「食の地域資源の発掘、島の食品開発、情報発信」という仕事は魅力的に思えたという。

豊永さんが協力隊任期の最終年度から取り組みはじめたのが、杵岐ゆず生産組合が作る商品を新しく生まれ変わらせることだった。杵岐では昔から柚子の栽培が行われ、柚子ごしょうや杵岐ならでは調味料「ゆべし」が盛んに作ら

れてきた。しかし今や生産者の高齢化と若者の「ゆべし離れ」が進み、その食文化は危機的状況にある。豊永さんは「こんなに美味しいのだから、もっと多くの人に知ってほしい」という気持ちで、「福岡へ帰省する時や若い人たちが、杵岐のお土産として買いたくなるようなおしゃれなものがほしい」という思いから、もともとあった商品のパッケージをデザインと一緒に考え、「最後かもしれない商品」と衝撃的なネーミングも考え出した。「平均年齢七十七歳の加工所のおじいちゃんたちにこのネーミングで売り出したい」と話す、最初は苦笑いされまし

た。でも私がこの地に定住し、島の人と結婚して子どもを育てていることもあって「がんばりなさい」と背中を押してくれたんです。豊永さんはネット販売も始め、売れ行きは好調だという。移住前から杵岐出身の友人に連れられて、何度も島へ来たことがあったと話す豊永さん。「でもいざ移住して驚いたのは、食べ物の美味しさです。ウニや杵岐牛などの絶品食材はもちろんですが、普段口にするお米や野菜、魚が本当に美味しいんです。しかも多くの家庭がそれらを自給自足したり、知り合いからもらったりしています。だから杵岐ではお米を買わな

が少ないんです。すごいですよね？」  
杵岐には移住者をはじめ、島外から嫁いできた女性やUターンの人も多い。彼らはSNSでつながり、杵岐への熱い思いを語り合うのだという。そうした人との出会いも杵岐の魅力だと感じている。  
最後に夢を尋ねると、「杵岐のお年寄りには元気なんですよ。今日は畑で野菜を作り、明日は海にワカメをとりに行く、そんな感じがとてもパワフルなんです。私もいつかそんな杵岐のおばあちゃんになりたいですね」とニコリ。その笑顔は、すっかり島のお母さん



ながさき移住 検索